TOKUMA NOVELS 書下し長篇サイコ・ホラー

SINKER 沈むもの

ンカー

Nightmare FILE

umeaki Hirayama

平山夢明

参考文献

『心の闇に魔物は棲むか』春日武彦著／大和書房
『沈黙を破って』森田ゆり編著／築地書館
『平成七年版　警察白書』警察庁編／大蔵省印刷局発行
『DSM―Ⅲ―Rケースブック　第二版』高橋三郎訳／医学書院
『精神障害者の責任能力』中谷陽二編／金剛出版
『精神障害犯罪者』セイマー・L・ハレック著　小田晋監訳／滝口直彦、他訳／金剛出版
『なぜかれらは天才的能力を示すのか』ダロルド・A・トレッファート著　高橋健次訳／草思社
『囚人狂時代』見沢知廉著／ザ・マサダ
『最後の名探偵』二階堂黎人監修／原書房
『虫のしらせの科学』米国ヴァージニア大学教授イアン・スティーブンソン著　笠原雄訳／叢文社
『超能力者の事件簿』アンドリュー・ブート著　財前潤一訳／青春出版社
『ちょっと不思議な話』南山宏著／学研
『演技者へ！』マイケル・チェーホフ著　ゼン・ヒラノ訳／晩成書房
『ブレイク詩集』〈世界の詩55〉壽岳文章訳／彌生書房
『宮崎勤裁判・上』佐木隆三著／朝日新聞社

書下し長篇サイコ・ホラー

SINKER 沈むもの

平山夢明

徳間書店

TOKUMA NOVELS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する。

アリストテレス「形而上学」より

主要登場人物

ビトー……超能力者、本名・吉沢敦夫。
セシリア・川本・マッキンタイヤ……通称ジジ。ビトーの婚約者。
キタガミ……南本郷署警備課刑事。
香奈……キタガミの孫。
プゾー……本名・藤尾逸馬。十人の子供の誘拐・殺害に関与した元児童発達心理学者。
兼信隆司……フレッド＆兼信法律事務所弁護士。
橋彪衛……八王子医療刑務所所長。
石田薫……警察庁科学警察研究所所員。
ジグ……幼女誘拐殺人犯。
波富樫正晴……警察庁警備局長、国務大臣の甥。
蜷川智貞……警察庁刑事局捜査一課長。
ウィリアム・ギルフォード……元FBI行動科学科課長、現スタンフォード大学犯罪学教授、キタガミの恩師。

0

女はリップスティックを掴むと赤ん坊の太腿に『死ね』と描き、そのあまりの不気味さに慌ててクリネックスで拭き取った。そんなに強い思い入れはなかった。頭にビニールをかぶせられた赤ん坊は、マニキュアの剝げた爪が肉に食い込んだのか、一度だけ短い悲鳴を上げた。発作が起きる前にやってしまわなければ、また夜中じゅう意識を失って歩き回るはめになるかもしれなかった。もうそれはこりごりだった。ジョンがくれた薬のせいだろうか。「ダイジョウブ、ケンコーノタメ、デス」と外人向けのクラブで出会ったジョンと名のる米兵は六本木にあるアメリカ人しか入れない施設に女を連れて行った。そこで女はステーキとワインをご馳走して貰ったのでお礼にジョンの部屋でファックさせた。終わるとジョンは「スキナトキ、キナサイ」とベッドにいた女に〝GUEST〟と赤い字がスタンプしてある通行許可証を投げた。それから女とジョンはたくさんファックした、部屋だけでなく、いろんな場所で。ジョンは見た目よりもずっと老けていたようで、しかも上級将校だった。プールでした時も階段やダンスホールのトイレでした時もあった。ジョンはファックの時、必ず女に水色のピルを飲ませた。怖がっていると「ウィアンセニ、ドク、ノマセマセン」と笑って口移しで飲ませた。最初の一ヶ月はジョンの言葉を信じなかった女も三ヶ月後には疑うこともしなくなった。それと同時に初めは飲んで五分も経つと身体が重くなって頭痛がしたピルが半年もすると気にな

らなくなった。女は盗み見したジョンのＩＤカードから本名がサンティーノであることを知っていたが、ジョンには黙っていた。ジョンがジョンでいたいのだから放っておこうと思ったのだ。渋谷の女の店に来る中年の客に話すと「それはイタリア系アメリカ人じゃないかな」と服からはみ出した女の乳首を嘗めながら答えた。そのうちに女は妊娠した。ハーフを産むんだと思うと他の日本人よりずっと優秀になったような気がした。女はアポイントを取らずにジョンの部屋に行った。すると別の女がジョンの上に乗っていた。後になって外人だったら怒らなかったかもしれないと思ったが、ジョンの上にいたのは自分よりもずっと醜い日本人の娘だった。女はその足で店に入ると馴染みで病気のなさそうな学生にゴムなしで本番をやらせた。堕胎費用を巻き上げるつもりだったが二週間後、やってきた学生に「あなたの赤ちゃんできたみたい」と告げると学生はハラハラと涙を流し「ごめんなごめんな」と謝り続け、責任を取るから結婚して欲しいと言った。自分の部屋に戻る気もなかった女は、そのまま学生の家で同棲を始めた。一度だけ荷物を取りに帰ると、不思議なことにジョンから貰ったプレゼントとテレビの上のポートレートが消えていた。最初は女の雰囲気に圧倒されていた学生の両親も、やがて髪が長いだの化粧が派手だのと言い出したので、女は宝石や指輪など金目のものを漁ると質屋に駆け込み、自分の部屋に戻り必要なものだけまとめて東海道線の特急に乗った。金は百八十万になった。女は大阪でアパートを借りると一日中、寝て過ごした。その頃から悪い夢ばかり見るようになった。梅田の産婦人科に行くと、「あんた、こりゃ無理でっせぇ。産むしかないわぁ。あんた良いおいどしとるさかい安産でっせぇ」と大福のような顔の医者に笑われた。この頃から記憶が飛び始めるようになった。時計を見ると朝九時だったのが突然、午後四時になっていたりする。そんな時、決まってお腹の子が胎内で動いていた。記憶ソーシツになったのだと女は思った。いろんなことが一遍に起きたから頭が疲

れているんですよと、毛穴の広がったイヤらしい内科の医者は言ったが、女には全てお腹の子のせいだということが判っていた。次第に記憶ソーシツはひどくなり、時には夜、ベッドに入ったはずなのに交差点の真ん中に立っていて、身体スレスレのところをトラックが通った衝撃で眼が醒め、悲鳴を上げたりした。薬局からミンザイを山ほど買い溜め女は不安になるとベッドの脚に手を縛り付けてミンザイをガブ飲みした。そうすると女とは別の意識もグッタリするようで安心できた。ある夏、気がつくと赤ん坊が子宮から飛び出していた。正確には飛び出す直前まで意識が無く、飛び出した直後に意識が戻ったのであった。女は赤ん坊と自分を繋いでいる灰色のへその尾を文具ばさみで切ろうとしたが、思った以上にそれは頑丈でヌルヌルしていて、なかなか切断できなかった。女は爪切りで管の端から少しずつ削るようにしてそれを切り離すとマンガで見たように畳の上に転がっている赤ん坊の足を持って逆さにして尻を叩いてみた。詰まっていた水道が通るように、赤ん坊の声は初めは弱々しく、途中から大きくなった。女は赤ん坊を血水の上に投げ出すと身体に残っている胎盤が排出されるまで横になっていた。赤ん坊は捨てる気だったので、そのまま転がしておいた。畳には染み着いた血と羊水の臭いが充満していたが女は気にならなかった。アパートのどこからか甘ったるい女の声で「かわいいべいびいはいはい」とラジオから歌が流れてきた。五時間後、女は雑貨屋で買った安物のバッグの底にバスタオルを敷くとその上にビニールをかぶせた赤ん坊を置いた。足には別の言葉を描いた。ジョンの言葉で女が憶えていたものだった。東京に向かう最終列車のなかで女が脚の間を伝わる名残の血に気づいてトイレに駆け込み、去年から売りだしたアンネナプキンを性器に押し当てている時、女を駅まで運んだタクシーの運転手は後部座席に忘れられたバッグから赤ん坊の泣き声がするのに気づいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

1

〈波〉はゆるやかに訪れた。温かいぬくもりがソファーに寄り掛かっていたビトーの脇腹から立ち上り、静かに臀部に広がっていく。〈風呂でも入っているのだろうか〉とビトーは時計を見た。午前二時。あの男が今ごろ風呂に入るとは考えられない。たぶんキングサイズのウォーター・ベッドのタイマーが再び動き出しただけだろう。それほど今夜は冷えていた。

頭がぼんやりしている。丁度、酒に酔っているようだった。つけ放しのテレビを消す。モニターのなかで「これが私の運命なのだ!」と狂った大統領役のマーティン・シーンが叫んでいたが、プチンという短い音とともに黒い鏡のなかに飲み込まれた。午後を過ぎてから水を一滴も飲んでいなかったので唇だけでも濡らそうとキッチンに入った途端、ビトーの視野が〈ダブッた〉。耐火レンガをフレミッシュ積みしたシンクの壁に、見知らぬ白いスラブの天井が重なったのだ。ビトーが冷蔵庫に視線を移動させても白いスラブはそのまま重なっていて、ビトーが激しく頭を動かすと、薄く透けている白いスラブの後ろでキッチンの風景がグルグルと回った。それはまるでスクリーンの前に立った人を幻惑させようと映写機を振り回すのに似ていた。やがてスラブの風景は消えた。タップリと一分はその光景はビトーの眼に映っていたし、身体の温もりは消えていない。キッチンの温度計は六度。この隠れ家に暖房はまだ設置していなかった。

〈……な、なんだ〉

この一ヶ月間、何度もテープで聞いた声が頭の中で響いた。ビトーは〈沈む〉準備を始めた。思ったよりも老人は生命力が強いのかも知れない、それは

ビトーにとって準備を〈直ちに〉完了させることを意味した。それから五分以内にビトーはカーテンを引き、ガスの元栓を閉め、一旦外に出ると玄関の錠をダイヤル式のシリンダー錠に交換してロックし、裏口から戻り、戸締まりを整えると隣室に飛び込んだ。

家庭内の細々した雑貨を収納するために造られたその小部屋には、今は大きめのシングルベッドがひとつと自動交換式点滴装置、そしてその脇には大きめのオーブンほどの大きさの脳波・心電図計、それらをコントロールするトランスミッターが備え付けてあった。これらは自宅療養を希望する末期患者に医療機関が貸し出しているものと同じで、こちらで検出される心音や脳波などの様々なバイタルサインが電話回線を使って同時に掛り付けの病院でもモニターされ、異常があれば二十四時間体制で連絡が入ることになっている。ビトーは過去の経験からそれらを装着することを〈保険〉としていた。ビトーは連絡先をジジと暮らしている本宅にし、彼女には玄関のシリンダー錠のナンバーを書き付けた紙を預けていた。純粋で優しい彼女はボーイフレンドが一週間の出張に出たと信じているはずだった。

ビトーが裸になり、身体に皮膚保湿剤を塗っていると老人の声がまた響いた。眼をつぶっているのか天井の白いスラブは浮かんでこなかったが、動揺は隠せなかった。

老人は〈私は死ぬのか〉と言っていた。なぜ、こうもみな同じことを言うのかビトーにはおかしかったが声には出さなかった。

あらかじめ解凍しておいたブドウ糖や各種ビタミンを含有した点滴袋を六本、交換装置にセットした。一本が二リットルの大きさをもつそれらは、前の点滴袋が空になった時点で次のものが〈使用位置〉に押し出され、使用済みのものは装置外に排出される。交換のパッキン部に接続された患者のチューブが移動し、新しい袋に差し込まれることになっていた。

ドイツ製であり、日本ではまだ認可されていない。ビトーは消毒済みの点滴針を腕に刺すだけにして一旦、作業を終えると成人用のオムツを付け、パジャマに着替え、ベッドの柵にS字のフックを使って三リットルまで入る特大の尿バッグを下げた。

それだけ終えるとビトーは一度大きく深呼吸をした。これから行う作業は何度やっても好きになれない、自分を惨めにするものだった。彼は憂鬱さを閉じこめる努力をするためにジジの笑顔を思い浮かべた。ビトーは彼女の白い歯と笑うと口の両端に彫ったようにできる弓型のへこみが大好きだった。ビトーは黒い革のポーチから滅菌消毒してある導尿カテーテルを取り出すとパジャマのボタンを外し、オムツの合わせ目から固く縮こまったペニスを引き出した。麻酔作用のあるキシロカイン軟膏を尿道に塗り付けるとベッドに横になり、もう何度も繰り返したことだがカテーテルを静かに挿入した。

数分後、カテーテルが内壁を傷つけることなく無事、膀胱に達したことを残留していた黄色い液体が傍らの尿バッグに注がれる微かな音で知る。額に浮かんだ汗と目尻に滲んだ涙を袖で拭くと傍らの点滴針を注意深く取り、肘の内側静脈に差し込み、その部位を医療用テープで固定してた。みじろぎする度にペニスがカテーテルで引っ張られ、ビトーは自分が繋がれた犬になったような気がした。ビトーは最後の準備としてリップクリームを厚く唇に塗り付け、リップクリームを枕の下に滑り込ませると天井を見つめた。

そこにはビトーの好きな詩が書き付けてあった。

『狐火にたぶらかされて
さびしい沼地に迷っていた小さい子は泣きだした。
しかしいつもそばに居る神様は白衣を着てお父さんのように現れ、小さい子に口づけし、手をとって連れていった。
悲しみの血のけうせ、さびしい谷間をあちこちと泣きながら探していたお母さんのもとへ……』

ビトーはそれを施設のシスターに教わった。「あなたもいつか立派になればお母さんが現れます。神はそれを試練として与え、結果を見つめているのですよ」ビトーは本名を吉沢敦夫（ヨシザワアツオ）と言った。しかし、彼の顔や髪は日本人のそれとは違っていた。いつのまにか、彼の母が彼の足に書き付けていたという文字がシスターの間で愛称となり、彼もそれ以外を使わなくなった。それがビトーだった。

「泣きながら探していたお母さんのもとへ……」とそこまで唱えた途端、身体が反転するような感覚に襲われた。老人が眼を開けていた。白いスラブが今度ははっきりと見え始めた、と同時にビトーの書き付けた天井の詩が薄らいでいく。頭の真後ろに老人の息づかいが聞こえた、小さな悲鳴が喉から漏れているようだ。

〈う、なんだ、なんだこれは……〉老人が呻（うめ）いた。ビトーはベッドのなかに引きずり込まれるような巨大な力を感じた。視界が老人のものと逆転した。詩は揺れずに白いスラブが頭の動きにつれて揺れていた。〈だ、誰だ。おまえ〉

「ボナ・ノッテ、セニョール」老人はひとりベッドの上で満足気に呟いた。老人の隣にいる五十年来の連れ合いは、いびきを立てていた。もう老人の声は聞こえなかった。ただカツカツと廊下を軍靴で歩くような乾いた柱時計の音だけが室内にこだましていた。

「どうしたんです？」いびきが止まり老婆が呟いた。迷惑そうな皺が眉根に浮かんでいる。

「なんでもない」〈ビトー〉は練習したとおりの声音でそう伝えると眠りに落ちた。

2

キタガミが署長室のドアを開けると、見知った沼田署長の顔が連日の激務とプレッシャーで黒く縮んでしまっているように見えた。部屋には彼と相対して老人が立っており、晩秋の陽射しが溢れるなかでも、ただならぬ気配が満ちているのは容易に察せられた。「失礼」キタガミが去がろうとすると沼田が〈かまわん〉と口を動かし、小さく手招きした。キタガミは室内に入ると隅に仏像のように立つことにした。老人が喪服を着ているのがその時、判った。老人が持ってきていた新聞の切り抜きが来客用のソファーに投げ出されたままになっていて『香織ちゃん発見される』『手掛かりなく』『生きたままバラバラに!?』とそれぞれの読者層に拠った見出しが躍り、例外無く捜査の無能を書き連ねていた。

室内の光に眼が慣れてくるとキタガミは老人の顔に見覚えがあることに気づいた。老人は冴島香織（サエジマカオリ）の祖父であったはずだ。発狂寸前の母親に代わって惨殺された孫の遺骨を自宅に運ぶ姿は何度も午後の〈卑しい〉番組のなかで目にした。キタガミは署内の食堂でその手の番組が流れると有無を言わさずスイッチを切った。その度に周りの職員の視線を浴びたが、彼らもそれを眺めている自己を恥じるかのように俯（うつむ）き、続いてスイッチをいれる者はいなかった。キタガミは直接、捜査には関わっていなかったが身内を失う苦しさは十分に経験していた。

「……もう何もありません。署長さん。以前はこんなことをするなんてどんな種類の人間なんだろうと思っていましたが、最近、私は犯人の気持ちが判るようになってきました。人は傷つけたくない何かを持っているから犯罪を犯さないんだということが判りました。今の私には何も無い。守るものは何もな

い。こんな老いさらばえた身体は捨ててしまいたいほどです。こうなってみて、初めて自分にだって人が殺せるものだと判りました」老人は泣いてはいなかったし、捜査の不備を罵りに来たのでもなかった。そして、それはキタガミがこれまで目にしてきたどの遺族の姿にも見られなかった。

「今日、こうして家族を見送って考えました。自分をどっちに転がしてみるべきかと。今なら身体の続く限り人を殺してみせます。子供であれ、赤ん坊であれ……罪悪感はありません。そんな感情を置く場所は私のなかにはとっくに残っていないのですから。でも、その前にもう一度だけ署長さんに賭けることにしました。あなたは香織が見つかった時、部下にぬいぐるみを香織と一緒に解剖室へ運び入れることを許可してくれた。あれは母親の手作りでしてね。歯医者へ行く時や不安な時は必ずそばに置いて抱いていたものでした」そこまで言うと老人はキタガミに気づいたのか、一瞥して微笑んだ。キタガミは軽く頭を下げた。老人は喪服のポケットから紙キレを取り出すと、沼田の机に置いた。

「住所はそこです。本名は知りません。ビトーと言います」老人はそう告げると傍らにあったステッキとソフト帽を手にして出て行った。

沼田は老人が完全に出て行くまで、立ち尽くしたまま微動だにしなかった。老人の足音が去ると激しい怒りが顔に表れたが、それが自己嫌悪であることは司法警察官ならば誰にでも明らかだった。沼田は怒りをコントロールしようと努め、それは成功した。もとのドス黒い顔に戻るとキタガミに向き直った。

「今のは冴島香織の祖父だな」

「そうだ」と沼田は抽斗からショートピースを取り出すとくわえて火をつけた。「昨日、娘夫婦がパラコートを飲んで心中した。彼の妻は十年前に膵臓癌で亡くなっている。残されたのは別室で寝ていた彼だけ。一家全滅だ」

「知らなかった」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor